

## 令和7年度第1回岩手県子ども・子育て会議 会議録

日 時 令和7年9月17日（水）14：00～16：10  
場 所 エスポワールいわて 2階大中ホール

## 1 開会

○事務局（子ども子育て支援室・藤村主査） 定刻となりましたので、会議を始めさせていただきます。本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。私は、子ども子育て支援室次世代育成担当の藤村と申します。本日の司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ただいまから令和7年度第1回岩手県子ども・子育て会議を開会いたします。

はじめに、本日ご出席の委員の皆様は、委員総数 27 名のうち 20 名であり、過半数に達しておりますので、会議が成立しておりますことをご報告いたします。

本日の会議では、お手元にお配りの次第のとおり 5 つの議題について事務局からご説明し、皆様からご意見をいただく予定としております。なお、本日の会議は公開となっておりますので、ご了承願います。

それでは、開会にあたり、野原企画理事兼保健福祉部長からご挨拶申し上げます。

## 2 あいさつ

○野原企画理事兼保健福祉部長 委員の皆様方におかれましては、お忙しいところ、今年度第1回目となります、岩手県子ども・子育て会議にご出席をいただき、誠にありがとうございます。

また、日頃より、それぞれのお立場で、本県の子ども・子育て施策の推進にご尽力いただいておりますことに関しまして、厚く御礼申し上げます。

さて、本県では昨年度、こども・若者をはじめとする県民の皆様から様々な方法でご意見を伺いながら、そこで明らかとなった課題を踏まえまして、いわての子どもを健やかに育む条例に基づき、「いわてこどもプラン（2025～2029）」を策定したところでございます。

本プランでは、「こども・若者の権利を保障し、最善の利益を図る」ことをはじめ、ライフステージごとの推進施策を含む 7 つの基本的施策を掲げ、これに基づき、令和7年度から取組を推進しているところでございます。

本日の会議では、今年の3月末に最終年度を迎えました旧プランの実施状況等のほか、来年度以降の県の取組を検討するに当たりまして、「こども・若者からの意見聴取」及び「ライフステージに応じたライフデザイン支援」に関しまして、ご協議いただきたいと考えております。

「いわてこどもプラン」の推進に当たりましては、こども・若者や子育て当事者等のご意見を聴き、施策への反映を進めながら、子ども・子育てに関わる様々な「生きにくさ」を「生きやすさ」に変えるため、より実効性の高い取組を実施して参りたいと考えておりますので、委員の皆様におかれましては、それぞれの分野、お立場から忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。開会に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○事務局（子ども子育て支援室・藤村主査） 本日のご出席者ですが、お手元の出席者名簿に記載しておりますので、全員のご紹介につきましては省略させていただきます。

委員のうち今年度新たに就任された方をご紹介します。

岩手県私立幼稚園・認定こども園PTA連合会 日野岳 史乗 様です。

岩手県小学校長会 内田 留美子 様 です。

岩手県中学校校長会 佐々木 秀毅 様 です。

続きまして、3の議題に入らせていただきます。岩手県子ども・子育て会議条例第3条第2項の規定に

より会長が議長を務めることとなっておりますので、以降の進行を大塚会長にお願いいたします。

### 3 議題

#### (1) いわて子どもプラン（2020～2024）等の実施状況（令和6年度）について

○大塚会長 それでは本日の会議を進めさせていただきます。皆様ご協力のほどよろしくお願いいたします。

3の議題（1）いわて子どもプラン（2020～2024）等の実施状況について、事務局からご説明をお願いいたします。

#### 〔資料1-1説明〕及び〔資料1-2説明〕

○大塚会長 ただいま事務局の方からご説明いただきました。この件につきまして、皆様からご意見・ご質問がありましたら挙手をお願いいたします。

「なし」の声

○大塚会長 よろしいでしょうか。ありがとうございます。

#### (2) 岩手県子ども・子育て支援事業支援計画（2025～2029）の見直しについて

○大塚会長 次に、(2) 岩手県子ども・子育て支援事業支援計画（2025～2029）の見直しについて、事務局からご説明をお願いいたします。

#### 〔資料2説明〕

○大塚会長 ありがとうございます。ただいま事務局の方からご説明いただきました。この件につきまして、皆様からご意見・ご質問がありましたら挙手をお願いいたします。

「なし」の声

○大塚会長 よろしいでしょうか。ありがとうございます。

#### (3) 部会委員の指名について

○大塚会長 次に、(3) 部会委員の指名について、事務局から資料を委員の皆様にお配りいただければと思います。よろしくお願いいたします。

#### 〔資料配付〕

○大塚会長 ありがとうございます。

子ども・子育て会議条例の第5条第2項の規定により、部会は会長の指名する委員をもって組織するとされております。ついては、団体の役員改選による委員の改選に伴い、改めてたゞいませ配りした資料のとおり支援計画部会の委員を指名いたします。委員の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

また、本日欠席の委員には事務局からご連絡をよろしくお願いいたします。

#### (4) こども・若者からの意見聴取の取組について

○大塚会長 次に、(4) こども・若者からの意見聴取の取組について、事務局からご説明をお願いいたします。

#### [資料3説明]

○大塚会長 ありがとうございます。新しい取組としまして、こども・若者からのご意見を聞き、施策に反映したいということです。新しい取組ですので、皆様から、このようなところを反映させたらよいのではないか、このような取組はどうかなど、ご意見いただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○高橋委員 今、お話を聞かせていただいて、感じたところを率直に申し上げたいと思います。こどもたちの意見を聞く場を設けているというのが前向きでいいと感じたのですが、15名という参加者の数が正直少ないなとも感じました。今後、どのように周知しこどもたちを集めていくのかという率直な疑問を感じたところや、集まれるこどもたちよりも、集まらないこどもたちのほうに視野を向けていただければ、よりよい意見が集まるのではないかと思います。

居場所のあり方というところで、私も認可外保育施設で活動しているので、様々な話も聞かせていただいていますし、北上市で活動しているにあたって、その近辺のお母さん方が集まって、子育ての環境の意見もいただいています。やはり、市町村での格差というか環境の違いをすごく感じています。そこをいっとこ取りをして、県の子育て環境が良くなるといいなと感じておりますし、居場所がないと思っているこどもたち、例えば、小学校に登校できていないこどもたちに対しての学校側の対応は市町村によって全然違います。学校の敷地内にカフェみたいなものを設けている地区もありますし、市や学校は関係ないから保護者がどうにかしてというような声もありますので、そのような格差があるという実態を知っていただきたいというのも私が感じるところです。

人を集めるということは、すごく大変なことなのは私も実感していますので、まずは続けることなのかなと思っております。この活動がこどもたちの環境を良くすることにつながって欲しいと本当に切に願っていますので、今後とも続けていただければと思います。以上です。

○大塚会長 今のご発言に対して、事務局から何かありましたらよろしくお願いいたします。

○事務局(子ども子育て支援室・高橋課長) ありがとうございます。まさにおっしゃる通りだと思っております。本当にありがとうございます。

先日、学生15人を対象に、5つぐらいのグループに分かれてワークショップという形でご意見を伺う

場を設けたのですが、ワークショップという形ですと、15人程度が限界の人数だと感じております。我々のマンパワーにも限界がありますので、こういった形で広げていくのはなかなか難しいところもあるなと感じているところですが、こういった地道な活動を続けていくことも非常に大事だと思っていますし、我々だけで行っていくことではなくて、市町村、学校などをはじめとした様々な組織に広まっていくよう取り組んでいかなければならないと思っています。そのきっかけとして、皆様にも知っていただき、広めていただけるのも非常にありがたいと思っています。

また、なかなか意見が言えないような、そのようなところに来られない子どもたちには、インターネットを活用した意見聴取は1つの手だと思えます。それ以外に、そのような子どもたちが行ける居場所を増やし、子どもたちの声をたくさん聞いてもらえるような活動が定着していくことが非常に大事なのではないかと感じたところです。まだまだ行き届かないところが多くありますので、この場だけではなく、後日でも構いませんので、皆様からご意見をいただき、できるところと一緒に取り組んでいきたいと思っていますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

○大塚会長   ありがとうございました。他に皆様から何かございませんでしょうか。

○事務局（子ども子育て支援室・前川室長）   子ども子育て支援室長の前川と申します。

今のご質問への補足です。やはり、先ほどご意見いただいたとおり、声をなかなか発することが難しい立場にある子ども、例えば、先ほど虐待のプランのお話もさせていただきましたけれども、虐待を受けている子どもや乳幼児など、自分の言葉でうまく伝えられないような子どもたちから、どのようにして意見や意思を聞き取っていけばよいのかというところは、今後、我々も研究しながら進めていきたいと思っています。今回、児童虐待防止のプランを見直すに当たりましたが、多くの方には聞けないのですが、児童虐待を経験した方々からお話を聞けないかということで、様々調整を行っているところでございますので、ぜひ皆様からもアイデアをいただき、ご協力いただいて、様々な子どもたちの声をきちんと聞けるように取り組みを進めていきたいと思えます。

○大塚会長   ありがとうございました。他に皆様から何かございませんでしょうか。

○稲田委員   子ども・若者からの意見を聞くということは、とても大事なことだと思います。ただ、先ほどの意見にもありましたが、意見を言っているのだというような雰囲気や醸成されているわけではないのだろうという感じがします。子ども自身が安心して話しているのだと思えるような関係性や環境は、聞く側である大人の姿勢がすごく大事なような気がします。相手の年齢層によっても対応の仕方がそれぞれ違うと思うのですが、今県で取り組んでいるアドボケイトなど、そのような専門性を持った方々の存在はとても大きいような気がします。聞く側の大人たちもしっかりとした研鑽を積むことが必要だなと感じています。以上です。

○大塚会長   ありがとうございます。

○事務局（子ども子育て支援室・前川室長）   当室のアドボケイトの事業についてもご紹介いただきあり

がありがとうございます。

県では、社会的養護が必要な子どもたちの声を聞くための事業として、意見表明等支援事業を実施しております。児童養護施設に入っている子どもたちや、一時保護にとなっている子どもたちの意見表明をお手伝いするアドボケイトと呼ばれる方々が活動しているところでございます。

そして、安心して話していいのだという、そういう大人側の態度も大事だというお話がありましたけれども、そのとおりでございまして、私もアドボケイトの研修と一緒に受講しているのですが、やはり安心安全という環境がなければ、子どもたちは話せないのだということを、実際に虐待を受けた当事者の方からも伺っております。子どもたちが意見を表明していいのだ、話していいのだという、そういう環境を作っていくということも、社会的に取り組んでいく必要があると思いますので、皆様にもご協力いただき、取り組んで参りたいと思います。

○大塚会長 ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

○千田委員 意見聴取のテーマについてご提案がありましたが、子どもたちの意見を聞く意見表明権というところが、こども施策の真ん中になっていると思いますが、子どもの権利条約や子どもの権利について、こどもだけではなく大人にも知ってもらうために、「子どもの意見条約や子どもの権利を知っていますか」などといったアンケートを行ってもよいかと思います。または、子どもの意見条約についてのワークショップを行うことにより、広がっていけばよいのかと思います。

こどものアドボカシー、アドボケイト活動について、今は養護的支援が必要な方達に広がっているのですが、もっと活動が広がって、学校そして地域の中でも、こどもの意見表明や声を聞くという施策をどんどん拡充してもらいたいと思いました。以上です。

○大塚会長 ありがとうございます。

○事務局（子ども子育て支援室・前川室長） ご意見ありがとうございます。いただいたご意見について、今年度実施するこどもモニターの取組の中に取り入れていけるものもあると思います。いただいたご意見を踏まえて、取組を検討していきたいと思います。ありがとうございます。

○大塚会長 ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

○芳賀委員 確かに人数が少ない結果ではあるけれど、この意見の内容を聞くと、子どもたちはきちんと考えていて、意見を述べているなという感想を持ちました。今後、モニターを募集して、111名を対象にとありますが、このチラシは学校を通して配布したのでしょうか。

○大塚会長 事務局いかがでしょうか。

○事務局（子ども子育て支援室・高橋課長） モニター募集は終了しておりまして、今、応募いただいたモニターの方々から実際に意見を頂戴しているという状況になります。募集に当たっては、できるだけ

多くの方に目に触れるよう各方面に配ったと聞いております。学校にも配ったかどうかは把握しておりませんでした。申し訳ありません。

○**芳賀委員** ありがとうございます。学校にいるこどもの割合が多いので、ここの部局をみると、教育委員会の部分がありませんので、みんなに届く方法となると、学校を介することになるのかと考えました。学校でも配付物が多くあり、こどもは色々な手紙を持ってくるので、その中で自分の意見を言うというチラシが目につくための、配付する際のよいアイデアがあればいいかなと感じました。以上です。

○**事務局（子ども子育て支援室・高橋課長）** ありがとうございました。こどもモニター制度は募集が終わったところでありますけれども、引き続きこのような形で意見をお伺いする機会がたくさんあると思いますので、その際は学校をはじめ様々な機関とも協力しながら周知に努めていきたいと思います。ありがとうございました。

○**事務局（子ども子育て支援室・高橋課長）** はい。ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

○**山本委員** 少ない人数ではありますが、きちんと中学生が意見を出しているのをみて、大事なことだなと思ったところです。その中で、学習に対する不安といったことも、やはり思っているのだなと思います。先ほど芳賀さんもおっしゃいましたが、やはりこどもたちは、現状の所もすごく不安を抱えているのかなと思っております。

このテーマそのものを、県のほうで、このような話をしていくとよいというように出されているのかと思いますが、「あなたが皆と語り合いたいことは何ですか」といった形で、こどもたちが話したい内容について募集の際に1つ意見をいただいて、これをテーマの中に入れてもいいのではないかなと思ったところです。よろしくお願いいたします。

○**大塚会長** ご意見ありがとうございます。この件について、事務局いかがでしょうか。

○**事務局（子ども子育て支援室・高橋課長）** 非常に貴重なご意見ありがとうございました。確かに、こどもたち自身からどういったことを話したいかということ聞き、テーマを決めていくのは本当に大事なことだと改めて感じさせていただきました。今後の取り組みの中で、ぜひご意見を参考にさせていただきます。ありがとうございます。

○**大塚会長** はい。ありがとうございます。

○**大塚会長** この後、各委員の皆様からご意見をいただく機会を設けておりますので、ここで10分ほど休憩とし、14時50分から再開したいと思いますのでよろしくお願いいたします。

○**事務局（子ども子育て支援室・藤村主査）** それでは再開いたします。会長よろしくお願いいたします。

す。

#### (5) ライフステージに応じたライフデザイン支援の取組について

○大塚会長 それでは、議題(5) ライフステージに応じたライフデザイン支援の取組について、事務局からご説明をお願いいたします。

#### [資料4 説明]

○大塚会長 ありがとうございます。それでは、ご説明にもありましたように、支援の対象、支援の内容、既存の取組との連携などについて、皆様からご意見をいただきたいと思います。

会議の進行上、申し訳ございませんが、お1人様、2～3分程度でお話しいただくようお願いいたします。また、事務局において3分でベルを1回鳴らしますので、発言の目安としていただければと思います。それでは、桑原さんから順次お願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

○桑原副会長(長崎委員代理) 先ほどまでの議論の中で感じたことは、こどもの意見を聞き、それを生かして世の中をつくっていくということがとても大事なことだと共感しました。

反面、責任はこどもにはないと私は思いました。そこで、そのこどもたちの意見を聞いて、そのような世界や社会をつくっていくのは大人の責任であり、行政の責任ではないかと私は思うので、できればこどもたちの意見を踏まえて、これについて私たちはこう思うというような、責任ある立場の方からの提案があればよりよいと感じました。

もう1つ今のところに通じる話なのですが、児童館などは、毎日保護者の方たちがお迎えに来ます。長期休業中は、朝送りに来て、また迎えに行くと、1日2回保護者と会えるようなところです。コロナの時も対面で過ごしてきました。そういう意味で言えば、保護者の人たちと大変近い距離にあるところですし、毎日会えば変化に気付くことができるので、そういう意味でも児童館の役割は大きいのかなと思います。

小、中、高、それから先へとこどもはどんどん成長していくわけですから、その中で、例えば、小中学校でやってきたことを踏まえて、高校ではこのようなことをするという連携など、そういう部分を大事にしながらやっていくのがとても大事なことだと思いました。以上です。

○大塚会長 ありがとうございます。お願いします。

○米田委員 私は幼児のことをお話したいと思うのですが、市の要対協でもそうだったのですが、今、遊びたいこどもに遊べない親、という構図があり、お母さん達がそれで虐待になってしまうという構図がすごく多くあります。それも、ひとり親家庭の方が多いような気はしますが、ひとり親家庭でなくても、そのような状況があるというのはどうしてなのだろうなと思っております。親御さんも、時間に追われるだけで、こどもの面倒まで見ていられないというところがあって遊べない。こどもは、お母さんがいるから遊びたい。そのギャップを埋めるのは、多分、お母さんあるいはお父さん、ご両親が家庭にいる時間をもう少し多く取れないかなと思うのです。働き方改革と言われておりますが、せめてこどもが3

歳ぐらいまでになる前は、どちらかの親が1時間ぐらい早く帰るという、たったその1時間がそのこどもにとって、一生良い思い出に繋がる時間になるだろうと、私はいつも思っています。どちらにも時間がなさすぎて遊べないのではないかと思っていますので、子育てをする時間が、30分でも1時間でも親にあれば、家庭は上手くいくのではないかと思っています。

何年か前に、厚労省が、土曜日を地域と家庭に返すと言い、週休5日制になりました。地域活動をしていますので、地域にこどもたちが帰って来ると思い、色々なものを用意してこどもたちが来るのを待った記憶がありますが、蓋を開けたらこどもたちは帰って来なかった。みんなそれぞれ病院だとか、塾だとかということで、地域には帰って来ませんでした。思うようにいかなかった部分を変えていくシステムが今必要だと思っています。以上です。

**○佐藤委員** まず、今日のお話の中で、こどものアドボカシーのことが出ましたので、現状をお話したいと思います。昨年度からアドボカシーの事業が開始されまして、モデルケースの施設と児相で始まり、今年度から県内16施設全部に入るということになり、当施設にも、先日、県の方とNPO法人のアドボケイトの方が見え、こどもたちを年齢別に2つに分けて説明会が終わりました。そして、当初はこのようなアドボックスというのも、各ユニットに配置になったところで、いよいよ始まったというところであります。

今年は、定期訪問が2回あって、その他、アドボックスに投書があった場合には、いつでも駆けつけるという体制だということの説明を受けており、今のところ投書された実績は、うちではありませんけれども、点検を怠らないようにしなくてはと思っていますところです。これから永遠に続く事業ですので、いろいろなこどもたちの本音、今まで聞かれなかった本音が聞かれるのではないかと思いますので、そういう状況ということをお知らせいたします。

それから、ライフステージへの取組についてお聞きしたのですが、これはぜひ、私たちのような施設でもやらなくてはならないと思いますし、支援や協力をお願いしたいと思いました。と言うのは、色々な形で崩壊に至っているような家庭のこどもたちをお預かりしているからですから、こどもたちにすると、自分の親ですから、やはりそれがモデルになってしまいます。それに対して、自己決定というのが最終的なものでしょうけれども、色々なライフステージの情報を提供してくださるということで、自分の家庭、あるいは自分の親だけをモデルにしたのではない、そのような情報を得られるということは、幸福な道に繋がっていくのではないかと思います。性教育も大事だと思い、うちでも多少は取り組んでいますが、それだけではなく、人生全体を考えさせるような取組がいいなと思って拝聴いたしました。ぜひ、色々な形でご支援をいただければと思います。以上でございます。

**○米田(千)委員** 私は、大船渡市母子寡婦福祉協会の会長もやっております、先日若い母子家庭の30代、40代のお母さん方を対象に、ファイナンシャルプランナーによる講座、ライフステージ、ライフプランの設計等について、講座を開きました。皆さんとても熱心に聞かれて、苦しい生活の中でも、こどものために将来の設計をしていますという方もいましたけれども、多くの方々は、このような講座を始めて聞いたので、もっと早く聞きたかった、大変参考になったとお話しされているお母さん方が多かったです。私は、こどもよりも、ひとり親家庭に特化するような意見を言ってしまうのですが、その辺はどうぞご理解をいただきたいです。

県の連合会では、県からの助成金を受けて、ひとり親家庭の就業支援のためのパソコン講座や、介護職員の研修、家庭生活支援養成講座を実施していますが、その講座の中の1コマに、弁護士さんから話を聞く時間を設けています。やはり、対面で専門家の話を聞けば、ひとり親のお母さん方が、今自分が抱えている問題の解決の糸口が見つかるということで、対面は非常に大切だと思います。ひとり親家庭の現状は、一般的には、夫との死別とか、離婚とか、そのようなことで数字が上がっていますが、その裏側や影には、未婚の母となつて子どもを産んで育てているというお母さん方もけっこう多くおられます。そのような方たちこそが、養育費の問題であるとか、色々な難しい問題を抱えています。現在、物価高の影響で、ひとり親家庭が子どもを育てる環境は本当に厳しくて、地域での子ども食堂や周りのサポート等でやっとなどもを育てている、経済的に困窮している家庭が多いです。母子家庭が貧困であれば、そのまま寡婦家庭の貧困にもつながるという現状で、いろいろな情報を多くの方々に早い段階で知っていただきたいと思います。

その点を踏まえて、ライフステージの資料5ページにも書いてありますけれども、高校生に向けてライフプラン設計講座の実施を令和5年度から実施されていますけれども、実施を希望する県内高等学校を公募とあります。お金や結婚、妊娠、出産、子育てということの正しい知識や考え方を高校生に与えてくれるものと捉えますが、希望する学校だけではなく、できることならば、全ての高校や中学校など幅広いところまでこのような講座を実施して欲しいと思います。以上です。

**○内田委員** 子どもは毎日元気に学校に来ています。朝挨拶すると、今日1日頑張ろうという心が伝わってきて、とてもいいな、児童全員がこうであればいいなと日頃思っている毎日を送っています。

ご意見というよりは感想になるかもしれませんが、実態になるかもしれません。ご意見を伺いたいポイントに沿ってお話したいと思います。支援の対象は、小学校の校長ですので、小学校にできる支援という視点で感想を述べさせていただきます。支援の内容としては、14ページに、ライフステージに切れ目のない支援のイメージでは、小中学校では、乳幼児との触れ合いを通じて、家庭の意義の理解を深めるとありますが、これは1つの例であると感じています。小学校は、ライフデザインを自己決定できるための素地あるいは土台を作っていく、そういうライフステージと考えています。したがって、小学校の教育活動は、2ページに視点が示されている、①住まい、②学び方・働き方、③健康・生活、④家族、そして⑤お金について、これらの幅広く学ぶ機会を設定しています。それは、例えば、地域とつながる清掃活動の行事や、あるいは家族の大切さを学ぶ生活科の学習や家庭科の学習。そして、自分の健康について考える保健体育の学習。そして6年生では、総合で、自分の目標、例えば、看護師や保育士になりたいという、その夢に向かって、どんな形でどんな学校に入ればいいのかなど、未来設計図を作る活動もしています。今回この資料を拝見して、各学校が行っている教育活動と、行政が今行おうとしていることと今までもしている取組が、連携していければいいなと改めて思いました。

最後に、岩手県教育委員会が出している教育指針における目標も、「すべての子どもたちと学校のウェルビーイングの実現を目指して」ということで、方向性が同じだなと思っています。小学生にできる支援を連携していきたいと思っています。

**○佐々木委員** 最初に質問をさせていただきたいのですけれども、この高校生向けのライフプラン設定講座は、中学校を対象に行われたところがありますか。

○事務局（子ども子育て支援室・高橋課長） 今のところは高校向けのみで行っております。

○佐々木委員 はい。ありがとうございます。ぜひ早いうちに、中学生にもこういった講座を設定して進めていただけないかと思っていました。理由は、私は校長になり4校目になりますが、全ての学校で、子どもたちに将来についてのアンケートをとっています。アンケートを取ると、「将来不安ですか」という問いに対して、約7割から8割の子どもが「不安です」と回答してきます。その理由は、戦争、感染症、中には不景気など現実的な問題を書いてくる子もいます。将来に対するイメージが湧かないと書いてくる子もいます。このイメージが湧かないというのは、我々の世代だと、敷かれたレールがあって、先生や医者、弁護士になるという目標を持って進んできたわけですが、既に子どもたちは、10年後、4割の仕事がAIにとって変わるというようなことを新聞記事で知っていますし、我々も話をしています。

そうすると、レールがないところにレールを自分で敷かなければならない。そういった時代がこれからやってくるということは、中学生も十分に認識をしているところです。そういった中で、これからこの不安定の時期を乗り切っていくためにはどうしたらいいのかとなると、単純な子もいるので、4割の仕事がなくなっても、Y o u T u b e rとかゲーマーになればいいと回答してくる子もいますし、実際にゲーマーになるのだから学校に行かなくてもいいと、それを原因に不登校になっている子もいます。

でも、そのような夢が叶う子は一握りでありまして、実際のことを考えると、やはり色々なことを考えていかなければならないのかなと思っています。ですので、ぜひ、ライフプラン設計講座を中学校でもお願いしたいと思います。先ほど委員からお話がありましたが、私も同感で、この講座内容に関する実態調査、子どもがどのように考えているのかという意識調査だけでも、広めて実施されてみてはどうかと思います。

今は、まち comi メールなど、欠席や連絡については全部メールで、学校に知らせるようになっております。そのメール等を使ってアンケートを実施して、意識調査をするのはどうかと思っています。もしライフプラン設計講座を中学校でやるのであれば、ぜひ仙北中学校でお願いしたいと思います。以上です。

○金浜委員 将来のことを考えて、子どもがライフデザインを持って成長して、その先に豊かな人生を送るためには、議論されていることは、ぜひどんどん展開して欲しいと思っています。大谷翔平のような見本がありますけども、ああいった方が増えてくるといいなと期待しながら、毎日子どもたちの夢を聞いて診療しています。

今日話したいことは、保健教育の必要性についてです。あともう1つは、非認知能力を周知することです。1点目の保健教育ですが、資料12ページのプレコンセプションケアのかたつむりのような図がありますけれども、新生児というところがありまして、赤ちゃんが生まれ、成長し成人して、また赤ちゃんを産んでというような昔からのサイクルがあります。左側の上から5行目ぐらいのところに、プレコンセプションケアというのは、「男女問わず、性や妊娠に関する正しい知識の普及を図り、健康管理を促す取組」と書いてあります。性とか妊娠に関する知識の普及に捉えられているのですが、健康管理ということも大事なことだと思っています。このサイクルでみると、僕が小児科で患者さんを診ていると、40年前に医者になった頃は、ほぼ母親がお子さんを連れてきていました。90年代は、おばあちゃんが連れて来る人が多くなってきて、2000年代に入って、時々お父さんやおじいちゃん、そしてお母さ

んもといったようにバラバラになってきて、2010 年に入ってから、本格的に父親が登場し始め、今や半分以上父親という日もあります。つまりその裏を返せば、核家族化が進んできて、両親と祖父母と一緒に住んでいないとか、両親が仕事をするようになってきたということ、それから、男性の働き方改革も進んできているので、育児参加が進んできているのですけれども、そういう中で、いわゆる健康の維持の知識をネットでも調べられますけど、それを裏付けする経験がないなということを感じて、本当に基本的なところから説明が必要だということが多いです。

別な見方をすると、少子化は、たぶん産科の人が一番感じていて、それを受ける僕たちが身近で一番感じて、そのあとに皆さんがだんだん感じてくるのだと思います。少子化がどんどん進んでいるのに、夜間救急、受診者数、休日診療所や電話相談の数もむしろ増えています。それは、多分、今話した知識とか経験が不足していることの表れなのかもしれないと思っています。こういう健康維持のための知識経験を、昔はおばあちゃんやじいちゃんがいて、それは大丈夫だとか、そういう経験を裏付けにして子育てが進んで、その親がまたこどもに受け継いだかと思いますが、今は僕の世代ぐらいのおじいちゃんおばあちゃんもそういう自信がない方とか、その親を囲む園とか学校の関係者の自信もあるかどうかというところを感じながらやっていますので、ぜひ保健教育、このプレコンセプションケアの中の性と妊娠に関する知識以外の部分で、できれば教育の部分などで展開していくのもいいなと感じています。実際には、僕らは診療で細々説明を行ったり、講演会で話したりすることしかできないのですが、本当は社会全体でやればよいなと感じています。

それから2点目の非認知能力は、もう今まで語り尽くされていますけれども、幼児期からすでにその教育の中で、非認知能力を育てるということは始まっていますが、引き続き、小児科や産科の方で妊婦さんのところから幼児期につなぐまでの、乳児を育てる親のところ、そのような周知を図って参りますけれども、県のほうの配慮で、母子健康手帳の裏表紙をめくって、さらにもう1枚いったところに見開きがありますので、それをぜひ周知していただければと思います。以上です。

**○吉田委員** 最近、連休明けや長期休暇の後に、若い人達が自分で辞表を出せなくて、どこかに頼んで仕事を辞めていくという方が増えているのを見て、どのようなものかなと思っていましたけれども、最近うちに来ている医療関係の会社の人達も、この間入ってきた人が1ヶ月で辞めていったと。それはやはり、もっと年齢を下げていかないと解決しない問題なのだろうなと思っていました。皆さんや職員の方の意見が大事だなと思って聞いていましたけれども、医療関係として金浜先生と重なるのは、非認知能力なのですけれども、うちで生まれたこどものお母さんには、小学校に入るまでの、特に幼少期のこどもの育て方や習慣性など、色々なことが土台になっていくものだということは、皆さんにお話ししているのですけれども、その後の啓発などは、行政の方々のお力が必要なので、そのところよろしく願いしたいと思っています。

あと、プレコンセプションケアは、やっとな全国的にどこかで聞いたことがあるなということになってきていますが、ものすごく幅が広い内容で、こども家庭庁で3つのセクションで、ガイドラインなど色々なものを作っているのですけれども、専門的過ぎて現場に降りて来たときに使いにくいのだろうなと思いつつ、日本の産婦人科医会のほうでは、それをもう少し患者さん向けに直してやっていかないかということをお提案して、やり始めたところです。前川室長からお話しがあった、高校生向けにもプレコンを扱うことは非常に嬉しく聞いていましたけれども、どのような方を頼んで講師にしているのかが不明

でありまして、できれば産婦人科関係、県の医師会、市の医師会など、他の行政を全部取りまとめて、組織的な構築をしていただければ充実したものになるのだと思います。そうすると、こちらでも色々なときに、この分野はどこに頼めばいいというようなことがお伝えできると思うので、今後そういうところを相談していきませんか。よろしくお願ひしたいと思います。

**○津野委員** 今回のライフデザイン支援というものは、若い方々が自分の将来のことを描いていくことを考える非常に大切な取組だと思っておりますので、個人としてもとても応援したいと思っています。

対象としましては、段階的に拡充とありますけれども、現在は高校生、大学生に力を入れていらっしゃるということで、様々な方々のお話を聞いていきますと、それぞれのライフステージにやはりこういった応援は必要なのだとすることを改めて感じましたので、この段階的に拡充というところを、ぜひ広げていただきたいと考えています。内容につきましては、住まい、健康、金融など、人生にかかせないテーマというものがたくさんあると思うのですけれども、それらに幅広く扱っているということは、とても意義があるように感じました。

ただ、講義を聞いているだけですと、どうしても自分事として考えられない、抽象的だと感じてしまいますので、今回高校生にワークショップを行っておりますけれども、こういった体験的なプログラムというのは非常に有効であるなと感じました。

自社のことになりますけれども、新入社員向けに金融リテラシーを学ぶ講座を設けたのですけれども、自分のお給料で人生をどのように過ごしていったらいいのだろうという不安を抱えている社員が、専門家の話を聞くことで夢を持てるということが自社でありましたので、この事が小さい頃から行われていくということは、自分事として考える上でとても必要なものになるのではないかと思います。

報道の立場からいたしますと、こういった素晴らしいことをやっているということを報道するだけでは、どうしても伝わりにくいことがあります。ですから、こういった授業だったり、ワークショップだったり、学んだ方々がどのように変わっていったのか、ストーリー性が見えることで、私たちも報道がしやすくなるということがありますので、取組自体が成果として見えるのは非常に時間がかかることだとは思いますが、私たち報道機関も一つ一つに目を向けていきながら、社会に発信していくことが必要なのではないかなと感じました。

**○高橋委員** 私自身も、ライフステージに応じた切れ目のない支援のイメージというのが、心強く感じました。やはり、まず知ってもらうのが重要になるのかなと感じます。知ってもらうと、そこから意見を聞くという循環ができていくと思いますし、幼児や小中学生、それぞれの教育の場でどう指導する方々が伝えていくか。現場側として思うことは、日々の仕事に加えて、このような新たな情報を伝えていくというのは、かなりの負担というか、困難なものでもあるということも正直感じました。そうなった時に、どうやって知ってもらうのか、こどもたちから素直な意見を聞くのかということを考えたときに、やはりやり方が重要ということや、授業に取り入れてもらえるのは可能なのか、不可能なのか、今はオンラインが普及しているので、オンラインを活用できるのか、できないのかというところも知りたいと思いました。

私は幼児のところはイメージできるのですが、小中学生や高校生がどのような現状なのかということに疑問を感じました。

幼児の頃から伝えていくことで、社会人になって生かすという循環ができれば、こどもたちもとても心強いのではないかと思いますし、県からと聞くと硬く感じてしまうところがあるかと思うのですが、県は自分たちの味方なのだと感じることをしてもらえれば、こどもたちも意見を言いやすいと思いますし、助けてという声も出しやすいのかなと思います。

その他の話題のところでも、私自身が感じたのが、満足度というのが大事なのかなと感じました。結婚、妊娠だったり、虐待だったり、そういう1つ1つの問題でも、結婚したい人もいればしたくない人もいるし、虐待を受けていると思って過ごしているこどももいれば、周りから見て虐待と思ってても本人はそう思っていなかったりと、それぞれの感じ方や満足度があると思います。なかなか難しい話なのですが、一人一人の満足度を聞くということも大事なのかなと思いました。

○大塚会長 ありがとうございました。

○日野岳委員 ライフデザインのことからお話しさせていただくと、資料を見ていると非常にまぶしくて、僕にはこのような人生はなかなかできないというのが1つの感想です。人生は基本的にうまくいかないものだと思うのですが、勉強しようと思ってもなかなかうまくいかない、スポーツをやろうと思ってもうまくいかない、そのような小さな挫折をこどもの頃から色々と積み上げていくかと思います。結婚したけれどもこんなはずじゃなかった、こどもが生まれたけれどもこんなはずじゃなかったということのほうが多に多い。うまくいっている人の話というのは、今ネットにいくらでも溢れていまして、先ほど委員の方からも大谷翔平という話がありましたが、もちろん、あのような方を目指していくということは悪いことではないのですが、個人的に僕が興味あるのは、いわゆる挫折した人の話であって、うまくいかなかった人の話、特に若者こどもには、そのような振幅を与えるのが大人の責任だと思っています。貧乏だけど歯をくいしばって楽しく生きている人たちだっている。そのような人の話を聞くというのは、非常に大事だなと思うので、ウェルビーイングできなかった大人といったように、振幅があったほうがとても素敵だなと思います。そのようなことを実現できない人、部長になりたかったけどなれなかった人、左遷されてしまった人、商売がうまくいかなかった人、自己破産した人、そういう人の話を若者やこどもにもそういう人の話を聞いて欲しい。

今、多様性ということが非常に話題に出ますが、昔の野球帽をかぶって歯が抜けて、大五郎を持ったおじいちゃんの話なかなか聞く機会がないと思います。でもそういう人の方が、意外に人生深いことを持っていたりする。それは、こんなはずじゃなかったと思いながらも幸せに生きるということもおそらくあり得る。そのような人たちの話を若者にも聞いて欲しい。僕もこどもが3人いますが、そういう人たちの話をこどもには聞いて欲しい。お金はないけど幸せだよとか、離婚したけど幸せだよと、仕事が上手くいってないけど幸せだよと、そういうことだっておそらくあり得る。そういうふうな振幅の中で、僕の仕事の現場で言えば、人が死んでも幸せだよというご家族もいたりするわけです。そういうふうな振れ幅をこどもたちや若者に見てもらおうということは非常に大切なことなので、いわゆる社会的にプラスの方向に進んでいるような人の話だけではなく、うまくいかなかった人たちの話、どんなに頑張っても昇進できなかった人の話、どんなに頑張ってもどうしようもなくなった人の話。そのような話というのを聞ける場を作れる場を作って欲しいなと思います。

また、先ほどの意見表明という話に戻りますが、若者の意見表明というのは、非常に大切なことである

というのは共感しますが、意見を表明してくださいと言われて、意見を表明することは、非常にハードルが高いわけです。皆さん一人一人話してくださいと言わないと、なかなか意見を言うことは難しい。会議慣れしている僕達ですら難しい。それを高校生や中学生に、もちろん話しやすくするという前提はあるにせよ、酷とまでは言わないけれども、ハードルが高い。そういったところをどのような形で解消していくか、もしくは、そのように出た意見は、僕は正直、上澄みでしかないと思うので、やはり本音で話しているかどうかというのは非常に難しい。

こどもたちは頭がいいので、こういう場ではこういうこと言っておけばいいなと思う子もいます。それも言っていることに間違いはないのですが、そのような空気感の中で意見を表明せざるを得ないというような手法以外を取ったほうが、むしろ、本音に近いようなところなのではないかと思います。このような会議の場では「いい会議でしたね」と当然言うしかないわけです。でも、休憩時間に煙草を吸いに行ったら「いやちょっとあれはないよな」となることはあるわけですね。そのようなことは、わりと大人の世界では日常的にあるのに、こどもには本音で話してくれというのは、やはり無理がある。

僕たちが本音で話して、会議が盛り上がっている姿を見せることができるのであればそれも可能ではあるのですが、それは日本の良くないところで、会議の手法やワークショップという名で行っているだけでは、どうしても追いつかないような気がするので、もう少しその辺の意見を表明してもらうというところにたどり着くまで、おそらく2段階が3段階必要。その辺の段取りの踏まえ方というのがないと、意見表明と言ったときも、意見は表明してくれるけども、上澄みの意見表明になるのかなと思います。やはり沈んだ意見を拾ってこそ、広く行政のためになるものが完成されてくるような気がするので、上澄みを拾うのではなく、もう少し沈んだ意見というものをどういうふうに拾っていけるのかという手法、方法論を考えたほうがいいのかというような気がしております。

あともう1つ、意見表明についてですが、本当に聞きたいのかどうかということは、もう少し議論すべきなのかなと。こどもは、先ほど言いましたが頭がいいので、この人は本当に聞きたいのかなということは、話しているとわかります。仕事だから聞いているのかなと思われる、基本的にはこどももそのような対応しかしないような気がするので、本当に聞きたいのだというような熱量を聞く側がどれだけ持っているかというのは、非常に大切なことなのかなと思います。その熱量が持てないのであれば、まず本当に聞く必要があるのかどうかを考えてみたほうが良いのかなと思っております。ありがとうございます。

**○山口委員** 私も同じように、目標は確かに素晴らしいですが、どうしても理想ばかりを追い求めて、もちろん理想を追い求めなければ良いものにはならないのですが、現状として、まずこどもたちが将来に対して夢や希望やわくわくドキドキという状況を大人たちが見せられるのかなと思います。一番身近な親がそのような状況にあるのかと言われたら、今、かなり保護者たちは厳しい状況です。仕事ももちろんですし、子育ても、自分が選んでシングルだったり、離婚したり、もちろんそれを選択した自分の責任ではあるのですが、そこを助けてくれる人は周りに居づらい。学校では学校連絡網がなくなり、大人同士がつながることも減り、どこにどう相談していいかもわからない。一人で孤立してしまう方がすごく多いです。そのような状況の大人を間近で見ているこどもたちは、将来に希望や夢、結婚したい、こどもを産みたいと、なかなか思えないのではないかと常に思っています。

あと、公募や色々なところで意見を集めるとありますけれども、積極的にアクティブに動いているこどもたちの意見は信念を持っているので理想の夢を持っているのですが、そうではないこどもたち、この

ような意見の場に来られない、意見を発信できない、うちにこもっていて、本音を話せないということも私たちの気持ちや考えを、どうにかして汲み上げないとならないと思います。これから小学校、中学校、高校とカリキュラムが増え、将来を早く決めなさい、こういう大人になりなさいという理想を押し付けがちになってしまうので、もっとこどもがこどもらしくいられるか、色々な人、大人、世代、職業と触れるリアルな体験をたくさんして欲しい。そういう場を設けていただけたらと思います。

P T Aでも、講習や講演会はしてはいるのですが、そのような場に来て学んで欲しい保護者ほど来ないことのほうが多いので、どうにかして広めていただけていただければと思っています。以上です。

**○稲田委員** 資料の14ページのライフステージのところに幼児の欄もありますので、私ども保育の仕事をしておりますので、そちらの関係のお話をさせていただきたいと思います。保育園での定番の質問で、大きくなったら何になりたいとよく聞くわけですが、こどもたちは自分の親御さんの職業だったり、あるいは保育園の先生だったり、アニメのヒーローになりたいなど、自分の知っている限られた世界で物事を考えてお話をしてくれます。面白いもので、避難訓練をすると、消防士になりたいということもぐっと増えたり、交通安全教室をすると、警察官になりたいということも、一時的にどっと増えたりということがあります。ということは、私たちは、そのような選択肢をたくさん示してあげることも大事なのだろうとお話を聞いて感じました。知っていることを増やしてあげるのが、我々の今できる仕事の1つなのかなと思っています。

先ほど室長さんがおっしゃった、知っていてやらないということと知らないで選ばないということの違いもあるのかなと思っていましたので、多様な選択肢を示してあげることが、今私たちのできることなのかなと思って話を聞いていました。以上です。

**○芳賀委員** それぞれの立場で、皆さんのお話を聞かせていただいて、色々な取り組みをしているんだなと改めて感じました。やはりこのライフステージに応じて切れ目のないということは大事だなと思います。大学生でも何をやりたかわからなくて、でも就活しなければならないから就活をして、就職して、でもすぐ辞めてしまうというパターンもあるだろうし、今、皆さんがお話されたように、たくさんの人や環境と触れ合う機会というのは保育園時代だけではなく、ずっと大人になっても続くものなので、そこを意識してこども園でもやっていきたいと改めて感じたところでもあります。

先日、学童で帰ってくる3年生の女の子に「好きな色は何？」と聞いたら「水色」と答えました。「何で？」と尋ねたら、推しが好きな色だからと答えました。大人が知らない世界からの情報がすごく入ってきて、推しは誰かと聞いたら、Y o u T u b eで調べてみるよう言われました。すると、3姉妹の一番下の女の子だったんですね。なんか無表情な女の子だったんだけど、「何でその子が推しなの？」と聞いたら、多分、自分と重ね合わせているというか、私たち大人が考えることと、今のこどもたちの捉え方が変わってきているので、優しく丁寧に見ていかなければならないのだなということをその時に感じました。ですので、例えば、性教育の部分から幅が広い、高校になれば、探究や、様々な自分が調べたいものを調べていく授業にどんどん変わってきているので、とても幅が広くて、何から手をつけたらいいのだろうと思いますけれども、県の取り組みもこんなに取り組んでいたのだなと今日改めて感じたので、地味な活動にはなりますけれども、やはり単発で終わらず続ける必要があると感じました。以上です。

○遠藤副会長(高橋会長代理) 私の保育園は八幡平市にありますが、人口も減少していますし、出生数が減ってしまっていて、同じ八幡平市の地域の中でもだいぶ子育ての環境の格差が出ています。小学校でもですし、育てている親御さんの環境もかなり違います。岩手県は広いので、人口が多いところもあれば少ないところもありますし、県南と県北とは全然違うので、地域ごとに具体的なライフデザインの例があった上で、それぞれの具体的な案が見えると良いと思います。今、私のこども園に来ている親御さんたちは、家を建てて、子育ての拠点があるといったイメージを作った人たちだと思います。人口が少なくなっていくと、こども園もなくなっていますので、住めるところがどこかというところからも、今のこどもたちからすると、うちのこどもは、今中学校3年生と大学1年生なので、こどもたちは、その後どうするかというデザインの範囲があまりに大きいと、選ぶ基準がないと思います。岩手県の中で、県北、県央、県南、沿岸で、こういうふうな生活している人がいるよとか、こういう将来もあるよというのを見て選べたらと思ったのが1つです。

あとは、性のことや健康のことなのですが、こども園など小さい子がいる施設に、小中高のこどもたちが来て、実際に触れ合ってみたり、体験してみたりという経験は、とても良いと思ったので、ぜひ県としても推奨して、小学校、中学校、高校の皆さんにも来ていただき、触れ合っていいただければと思いました。以上です。

○山本委員 私も幼児の施設に勤めていて、遠藤さんがお話されたように、中学生や高校生がこどもたちと触れ合う機会を持ちたいという申し入れがあれば受けるようにしておりました。自分のこどものことを考えても、色々な世代の人と関わることは、小さいときから、自分より小さいこどもと関わるのが少なくなっていると思っています。なので、小さい子と関わることに臆病だったりします。そういうことも自分がこれから結婚を考えるにあたって、何か不安などもあるのかなと思っています。

幼児期から様々な人に関わって頼って良いのだということを、自分のこどもたち、お預かりしているこどもたちに伝えたいなと思っています。みんな大事にされているのだ、お家の人はもちろん、園の先生たち、それから地域の人たちにも、とてもかわいがってもらっているのだということを実感できるように。そして、それは自分だけじゃなくて、他の人も同じで、大事な命なのだというところにつなげていけたらと思っています。人との関わりが増えると、もしかしたら、あのようになりたい、このようにお仕事してみたいなどをイメージすることにもつながるのかなと思います。こどもたちは、ごっこ遊びが好きなのですが、やはり自分が関わった人をイメージして遊んでいるので、そういった経験を大事にして、これからも関わっていきたいなと思ったところです。

○今西委員 この計画書を見ますと、全般的に網羅されていて、よくここまで作られているなということに感心させられるところでもあります。しかし、現状はどうなっているのかと言うと、先般の新聞報道にもありました、いじめは増える一方、青少年の自殺は過去最高、いろいろ計画を立てているのだけれども、その効果性は一体どこにあるのかなということでもあります。子育ての第一責任は家庭にあると、こういうふうに法律では謳われております。しかし、現状はどうなっているのかと言うと、子ども子育て新制度が始まって10年。家庭からこどもが離されているような状況が肌感覚としてはあります。認定こども園は12時間開所。では、こどもと一緒に過ごす時間は何時間あるのだろう。乳幼児などは、10時間は寝なければなりませんから、そうすると親と一緒にいる時間は2時間くらいになります。それで、本当にこ

どもが育つのかなということでもあります。それは、私の自分自身の反省としてもあります。そう考えると、こどもの育ちを保証するにはどうしたらいいのか。やはり、親ときちんと向き合う時間が必要なのではないかと思います。

私は、北上市の男女共同参画の委員長を20年間ほどしておりました。しかし、ほとんど変わりません。なぜ変わらないのかと言うと、やはり企業や会社の理解や協力が得られないからです。それが得られないと、こどもと向き合う時間は増えてこないのだろうと思います。いろいろな制度改革はされています。働き方改革もあります。でも、まだ不十分ではないかと思っています。このままですと、今の状況は、支援の必要な子が増えています。おそらく皆さんもそのような感覚があるのではないかと思います。それはなぜかと言ったら、きちんとしたエビデンスがあるわけではないですが、肌感覚としてあるのだと思います。そのようなことが子ども子育て支援制度が始まってから、顕著に出てきているように思います。

企業に対しても、こどもと親が向き合う時間を増やしていくことが子育てにとって本当に大切なことなのだとすることを、しっかり伝えていく機会を持ていただきたいと思います。北上市でも、企業にセミナーをしようとしてもなかなか理解を得られず、本当にそれを共有してくださる企業は少ないです。全く関心を示さない企業も多いです。果たしてそれでこどもが本当にきちんと育つのかと言ったら不安に思うわけであります。法律や制度の問題もあると思いますが、そういったことにもご理解をいただくような働きかけも必要ではないかと思っています。以上です。

**○千田委員** いわて子育てネットは、未就学児を持つご家庭の皆様が遊びに来る施設を運営しております。現状で感じていることの中に、現在の女性の社会進出などがありまして、保育園に通うこどもの年齢が2歳児、1歳児と低く、女性が社会に復帰する時期が早まってきたと感じています。良いこととしては、お父さん育児、お父さんがこどもと一緒に遊びに来ているのが増えてきていると感じています。今日、色々な意見など聞きながら改めて思ったことは、私達の所は、ご家族が遊びに来て、たわいもない会話の中で、こどもの親御さんの子育ての悩み、こんなことに困っている、こどもは今の時期だどこまで育てているんだけど何かちょっと不安なんだよねとか、いわゆるワンオペなんだよねとか、そういった保護者の気持ちに寄り添いながら、保護者の気持ちを安心させ、こどもに不適切な対応をしないよう、保護者の支援を主にしているというところがあります。

先ほども人生の挫折などのお話がありましたが、生まれてから未就学児、3歳までの一番大事な時期というのが、自己肯定感を育む原点だと思うのです。これは、やはり親子との触れ合いが一番大切なところだと思いますけれども、こどもと親が過ごす時間が2時間しかないといったお話もありましたが、私どもの施設でも、親子の絆やこどもが家庭で安心できる場所をどのようにして作っていけるか、保護者に対する支援が大切なのではと感じたところでした。

このライフデザインについて、どの時期からワークショップのようなものをすればいいのか。どの時期も大切で迷っているのですけれども、やはり、こどもが安心して家庭に帰るなど、安心する場所があるというのは虐待などがなくなる一つの要因だと思います。そのようなことも1つの方法、視点なのではないかと思いました。以上です。

**○藤澤委員** 岩手県社会福祉事業団では、県内に6つある児童養護施設の1つの和光学園を運営しておりますので、その関係で申し上げます。

施設のほうには、様々な問題を抱え、家庭生活が難しいこどもたちが生活しています。生活面や人間関係に課題があるこどももいます。そういったこどもたちにとっては、どう将来のライフデザインを作っていくかということは非常に大事な重要なことだろうと思っています。ですから、このような取組をわかりやすく噛み砕いて伝えていくことが、非常に大事ではないかと感じたところです。以上です。

○橋本委員 皆さんの発言を本当にそうだなと思いながら聞いておりました。自分自身も産後8週間頃からこどもを保育園に入れて、仕事をしながら子育てをしているのですが、仕事を休めないのこどもを病院に連れて行けなくて、こどもが小学生の頃にはおじいちゃんに連れて行ってもらったことなどを思い出しながら話を聞いていました。

こどもたちは、色々な場所で頑張って過ごしています。私は、放課後のこどもたちに関わっているので、ふとしたこどもたちの嘆き、学校でも言えないようなことや、お父さんお母さんの前ではできないようなつぶやきみたいなものも受け止めながらおりますけれども、やはりこどもたちからは、良い子でいたい、色々なところで頑張りたいという気持ちが感じられます。それは、小学校、中学校、高校と進むときは、進学先を見据えて学校に入らなければいけない、このような仕事に就きたかったらこの大学に行くというように、成功するための教えられ方というか育てられた方をされているからなのかなと思うので、失敗したとき、失敗した自分が嫌だったり、負けたり悔しい思いをしたくないというこどもたちが、最近増えてきていると思います。3ページのライフデザインの取組の意義のところには、ライフデザインを通じて若者のウェルビーイングが実現化されることが色々な問題の解決につながっていくのではないかとあり、これはやはりあなた達にこのようにして欲しいという大人側の希望が表れているのではないかなと思います。こどもたちには、どのように人生を選択してもよいと言っておきながら、選べるような社会になっているのかなと考えさせられました。

私の娘の話をする、先ほど、知らないで選択できないのと知った上で選択しないのは別という話がありましたけど、大学生の娘たちは、私たちは結婚もしないしこどもも産まない、と言っています。なぜそういうふうに言っているかは詳しくは聞いていませんが、私が忙しくしているからだけなのか、色々な情報や、子育てにはお金がかかるとか、出産するのも大変そうだななどの大変な話などを聞いて将来に希望が持てない、パートナーがいることだけが幸せではないという、色々な考え方があると思いますけど、若者たちはそれぞれ色々なことを考えていると思います。そのような若者やこどもたちに、きちんと届くようにしていかなければならないのではと思っていました。

今日ここに集まっている各方面の方々が、本気で考えているということを実感しているので、このようなところをこどもに伝えていくというのも大事だなと思っています。小学生も色々なことを考えているので、小学生だから早い、幼児だから早いということではなくて、色々な大人と触れ合う期間や機会が少なく、自分の親や友達のお父さんお母さんぐらいしか接することのないこどもたちに、色々な大人の姿を実感してもらう機会が必要で、知識だけではなく実体験として関わる場所が足りていない気がする、こういったところが大事だと思いました。以上です。

○大塚会長 ありがとうございます。委員の皆様からのご発言については、後ほど事務局からコメントいただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 4 その他

○大塚会長 それでは、4 その他について、皆様から何かでございますか。

「なしの声」

#### 5 閉会

○大塚会長 それでは、以上をもちまして議事を閉じたいと思います。進行を事務局にお返ししますのでよろしくお願いいたします。

○事務局（子ども子育て支援室・藤村主査） 会長ありがとうございました。最後に、当室の室長の前川からコメントをお願いします。

○事務局（子ども子育て支援室・前川室長） 本日はたくさんのご意見をいただきまして、ありがとうございました。私も、今日いただいた意見で、ものすごくエンパワーされた部分もございましたし、もっと気を引き締めてやっていかなければと改めて思ったこともたくさんございました。

色々な意見をいただいた中で改めて思ったのは、やはりそのこどもの声を聞くということを、私たちは、やったふりとか、アリバイづくりとかにははいけないなと。本当にこどもの声を聞くのであれば、私たちも覚悟を持って、きちんとこどもたちの声を、あなたの声を聞きたいのだということが、こどもたちに伝わるような、そのような対応をしていかなければならないということを改めて思ったところでございます。

私たち行政だけでできる取組ではございませんので、皆様と一緒に連携をさせていただきながら、取り組んでいきたいと思っておりますし、本当に意見を言っているのだ、意見を言えるのだという環境づくりですとか、意見を話したいと思える大人をたくさん増やしていくことが、これから私たちがやっていかなければいけないことだと改めて感じました。

本日は、皆さん貴重なご意見をたくさんいただきまして本当にありがとうございました。

○事務局（子ども子育て支援室・藤村主査） 本日は長時間にわたりご議論いただきありがとうございました。以上で令和7年度第1回岩手県子ども・子育て会議を終了いたします。ありがとうございました。